



黄金色に輝く田で

子どもたちが

「大したもん蛇米」を収穫



十月五日、下関地内にある関川小の学校田で、四年生・五年生による「大したもん蛇米」の稲刈りが行われ、児童と指導役として地域のボランティア、職員を含め約二百二十人が参加しました。五年生が五月に田植えをしてから五か月、黄金色に輝いた一反歩の田んぼに足を踏み

入れ、ボランティアの方から指導を受けながら、ていねいに刈り取りを行いました。体操着を泥まみれにしながらも、刈り取られた稲を慣れない手つきで「はさがけ」し作業は終了。

鈴木朋哉くん（5年・高瀬）は「稲刈りの体験は初めてだったけど、鎌で上手く刈り取ることが出来て嬉しかった。農家の人は米を作るために色々な作業があつて大変なんだと思つた。自分の家は農家ではないけれど農家の人に感謝したい」と感想を話していました。

子どもたちの手によつて収穫された「大したもん蛇米」は、先日行われた「堀と柳の秋まつり」で観光客の皆さんに配布されたほか、今月には五年生児童が新潟駅や古町などで関川米としてPR活動を行う予定です。

桜田門外の変烈士 「関鉄之介就縛の地」碑を建立 ～湯沢集落～

桜田門外の変で襲撃現場を指揮した関鉄之介が就縛された地として知られる湯沢集落。このたび同集落の松岳寺地内に「関鉄之介就縛の地」碑が建立され、記念式典が行われました。

これは村の地域活性化事業に採択されたもので、製作費には村の補助金等が使われました。

実行委員で同集落の河内正さんは「映画が公開されたあと、この地を訪れる観光客が増えている。これをきっかけに観光の一助となることを期待している。また、水戸市とも交流を深められたら嬉しい」と話していました。

関鉄之介が就縛された場所は、当時の湯沢温泉「田屋」（後の高橋館）で、この場所にも同日、就縛の地を示す標柱が建立されました。



松岳寺地内に建立された石碑と案内板



「性教育」を通して 「命の大切さ」を知る ～関川中性教育講演会～

10月5日、関川中学校で3年生を対象に「性はコミュニケーション～人間関係としての性を考える～」と題した性教育講演会が開催されました。講師は助産師・思春期保健相談士として活動されている酒井由美子さん。

子どもたちを取り巻く性の現状や性の暴力、出会い系サイトや非出会い系サイトによる性犯罪の実態などについて講演しました。

「性の教育」＝「命の教育」として話していた酒井先生は「人にとっての性は、生命を誕生させるための性でもあり、コミュニケーションをとるための性でもある。今、思春期を迎えている15歳の子どもたちが、これから大人になる過程の中で、性や命の尊さについてもっと考え、責任ある大人になってほしい」と話していました。

関川中学生徒

「職場」を体験した感想は……

十月六日、関川中学校の一年生四十九人が、村内の保育園や事業所、役場などで職場体験学習を行いました。

これは「キャリア学習」の一環で、将来、子どもたちが仕事を選択するにあたって、仕事とはどのようなものなのか体験しながら感じてもらい、社会性の育成やコミュニケーション能力の向上を目的として行われているもの。

職場体験学習は三、四人のグループに分かれて行われ、社会人の先輩から指導を受けながらはじめての「仕事」を

体験しました。

相馬鮮魚店での職場体験に参加した斎藤龍くん（下関）

は「将来の夢が調理師になることなので相馬鮮魚店を選びました。弁当の盛り付けは上手くできて楽しかったけど、思った以上に立ち仕事がついと思いました」と感想を話していました。

職場体験学習は、各学年で実施していて、二年生・三年生は、村内事業所のほかに、村外にある事業所での職場体験学習にも参加しています。



相馬鮮魚店では、お座敷のセッティングや弁当の盛り付けを体験したほか、エビフライ作りにも挑戦しました。

雄峰“劔岳”の
ふもとの町から届いた
ひとつの風船



九月二十五日、夫婦で稲刈り作業をしていた余語キイさん（深沢）は、田んぼに落ちていた白い風船を見つけました。「なんだらう、こんなところに……」近づいてみると風船には、一通の手紙と花の種が付いていました。風船は富山県中新川郡上市町から飛んできたもので、上市ライオンズクラブが子どもたちに夢を与えたいと、町内六つの小学校児童に飛ばせたものでした。

余語さんが拾った手紙には、こう書かれていました。「僕の夢は医者になることです。僕がとてもお世話になっているので恩返しをしようと思うからです」。

手紙を読み、余語さんはお孫さんの顔を思い出したそうです。余語さんのお孫さんは今年、理学療法士になり、石川県内の病院に勤務しています。「孫と同じ医療の道を目指している」ということもあって、お孫さんを思う気持ちと重なりました。

「返事を書きたい」文章を書くのが苦手だという余語さんですが、すぐにペンをとり返事を書きました。

「医者になりたいという夢に

向かって、頑張ってください。七十三歳のおばあより」

まだ、返事は届いていません。「私の手紙を読んでくれたかな」少し心配そうに話していた余語さんですが、返事が来ることを心待ちにしていました。

そして、手紙と一緒に付いてきたキバナコスモスの種。

「この種は来年蒔きます。手紙をくれた子のことを思いながら花見ができるのを楽しみにしています」と話していた余語さんの表情は笑顔に包まれていました。